

令和5年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属高等学校天王寺校舎

1 附属高等学校天王寺校舎の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

(2) 所在地

大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員480人(1学級40人)

(4) 幼児・児童・生徒数

453人(男子223人・女子230人) (令和5年4月1日現在)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人、副校長 1人、主幹教諭 1人、教諭 28人(うち、臨時的雇用5人、育児休業1人、再雇用職員3人)、非常勤講師 9人
事務職員 3人(専任1人、事務補佐員2人)、臨時用務員(用務員) 2人

2 附属高等学校天王寺校舎の特徴

本校は、開校以来附属天王寺中学校とともに6年一貫教育の研究、実践を続けてきた。また、令和5年度より第3期のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、現在はその成果を発揮しながら教育研究を継続している。

生徒の自主性を重んじ、多様な経験と活発な議論を通じて、時代を問わず通用する生きる力と、自律的に責任を持って行動する力を育てることを目指している。

3 附属高等学校天王寺校舎の役割

- (1) 大阪教育大学と一体となって、教育の理論と実際に関する研究を行うこと。
- (2) 本学の教育実習機関として、実習生を随時受け入れ、適切な指導を行うこと。
- (3) 教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てること。
- (4) 本学が行う現職教員の再教育の一端を担うこと。

4 附属高等学校天王寺校舎の学校教育目標

- 正義を愛し、真理を追求する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。
- 強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。
- 他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。
- 社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。

5 附属高等学校天王寺校舎の学校教育計画

1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づく諸活動を支援する。
2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取り組みを行う。
3. 学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

6 附属高等学校天王寺校舎令和5年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心をもち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志をもち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づく諸活動を支援する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、「協働」を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	討論活動、発表活動とそれに至る話し合いや意見交流の機会を担保し、協働を通じて個人が様々な学びを得ることのできる学習集団を育てる。 <国語科>	各学年において、協働的な学習課題を設定することができた。その過程で、さまざまな形式(ディベート、ワールドカフェ、少数・多数など)での議論を実施することができた。教科に留まらず、議論できる学習集団の素地を養うことができた。	協働的な学習課題の質を検討し、より高める必要がある。また、他教科とも連携し、生徒集団の議論のあり方を、適宜情報収集していく必要がある。	A	討論活動を実施する事が出来ていたと思う	A	
	①地理的・歴史的な知識を獲得させることにより、現代社会が多様な価値観に基づき形成されていることを実感させる。 ②多様な価値観を持つことを権利として尊重する態度を育成する。 ③①と②を達成できる授業を、中高社会科が連携し、探究的な学習を取り入れながら、実践する。 <社会科>	具体的、現代的な事象を取り上げながら、多様性を実感させ、権利として尊重する態度を育成するような授業を実施することができた。また授業の中で生徒が自ら探究する場面を設定することができた。	より深い知識と態度を生徒が身に付けることができるように、教科としてさらなる授業研鑽を行う。また教科として学習した知識や態度を教科内で終わるのではなく、実生活に生かせるように、さらに授業研究を行う。	A	探究的な学習を実施していたように思う	A	

グループワークやペアワークを伴う数学的活動を積極的に行っていく。さらに、授業改善のみならずパフォーマンス課題を用いた数学的活動に関する評価方法等を数学科内で収集・共有し、これを体系化し、指導と評価の一体化を目指す。 <数学科>	「グループワークを伴う数学的活動を実施し、その活動結果をまとめたパフォーマンス課題」や「生徒の疑問と学習内容を結びつけたパフォーマンス課題」を設定することができた。また、その内容を数学科内で情報共有することができた。	実践事例を数学科内で情報共有し、評価の在り方について考える機会を設けたが、数学的活動に関する評価方法等を数学科内で体系化することができなかった。	B	グループワークやペアワークを熱心に行っていたように思う	A	
中高ともに、実験や観察などを通して「協働する能力」や「科学的に探究する力」を伸ばすための授業実践に取り組む。ICT を活用して情報を共有させるとともに、データ処理の適切な方法を学ばせる。 <理科>	中高ともに、班で協力して取り組む実験・実習を実践した。	来年度は高校でも全学年で BYOD が導入されるため、さらなる活用を進める。また、データ処理の学習を系統的に組み立てる。	B	班で協力し、実験を行っていたと思う	A	
課題解決的な学習を授業の中で、協働しながら各個人の技術向上に繋がる指導を行う。ルールや練習方法など自分たちで調べ、実践していく中で自他を尊重する態度を養う。 <保健体育科>	課題解決的な学習の中で他者と協働し技術向上につなげることが出来た。各学年における運動技術の習得に向けて、生徒間での話し合いも活発になっている。	生徒はゲームの中で見出した改善点を修正するための練習を考えるとところまでは至っていないので、課題解決的な学習を行うための手助けとなる練習方法の提示の仕方を工夫していく。	A	協働して、技術向上を行っていたと思う	A	
自己のイメージをもって音楽表現を創意工夫する一連の過程を重視し、協働を通して技能を高めるとともに、感性を豊かにする授業を展開する。 <音楽科>	人前で演奏発表する機会を多く設定し、アンサンブルを創りあげる過程を通して協働力を養い、生徒自身が自己表現する喜びを実感できる授業を展開した。	あるべき表現を生徒自身の中で決めつけてしまうがために、表現の幅が狭まってしまう傾向がある。生徒たちが、より自由な発想でのびのびと表現できるようにするための工夫が必要である。	B		A	
ルーブリック評価を用いてパフォーマンス課題の設定やあり方について検討する <英語科>	研修を通じて、生徒の主体性を評価するためのルーブリック作成方法を教科で検討することができた。実際の授業においても、身に着けてほしい力を生徒に伝えるルーブリックを用いて評価を行うパフォーマンス課題を実施することができた。	指導と評価の一体化の観点から、ルーブリックを用いた評価が生徒の成長につながる指導になるよう検討する必要がある。	A	ルーブリックを用いて評価をされていたように思う	A	
全教員が生徒会・自治会活動（部活動指導、議会・委員会の運営等）に積極的に関わる体制を構築し、分掌として組織的に支援する。校種や発達段階に応じた指導体制を確立し、生徒一人ひとりが成長し活躍できる学校を目指す。 <生徒指導部>	生徒会・自治会活動（部活動指導、議会・委員会の運営等）をより活発にし、様々な取り組みを実現することができた。また、校種や発達段階に応じた指導体制も構築し、生徒一人ひとりが成長し活躍できる場面をつくることができた。	生徒会・自治会活動に対する教員の関わりがまだまだ限定的であるため、全教員がより積極的に関わる体制を、中高生徒指導部で連携し、検討していく。	A	自治会活動を支援していたように思う	A	

	中高合同で教員のニーズに応じた研修を開催し、個別最適な学びの実現に努める。 <健康人権部>	例年行っている AED 講習会に加え、避難訓練時に消防による指導を受けることができた。災害発生時の対応に加え、消火設備の使い方など、実践的な事柄を学ぶ機会が齎出できた。	不審者対応など、防犯に関する研修の機会を設けることを検討した。	B	AED講習などの指導をされていたように思う	A	
	生徒の発達段階に応じて授業立案ができるよう、模倣と省察の過程で理論知と実践知を統一する研究的な学びが実践できるよう研修内容を検討する。 <研究部>	パフォーマンス課題や多様な評価方法に関する研修を行なった。またその際、教科実践に基づき、フィードバックを受けられる機会を持った。	研修によって他の業務が圧迫されないように計画的に実施する必要がある。	B		A	

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心をもち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志をもち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取組を行う。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 生徒の将来の目標と生徒を取り巻く社会の状況も含めた進路についての意識を深めさせ、その実現に向けた支援を行う。	ミマモルメ等を活用しながら、出欠統計の方法について工夫を行うとともに、進路指導用のシステムや、校務支援システム、Google クラウドワークスペースをはじめとした Google Workspace の運用および、運用支援、校務支援システムの活用方法の検証を行い、円滑な進路指導に貢献する。 <教務部>	ミマモルメ等を活用して出欠状況を共有できた。また、中学校では健人部と連携しながら運用の検討や進路指導システムの検討を ICT 支援員と行った。その他、各システムの運用や運用支援を行とともに、中高で進路生の情報のやりとりについて円滑に行う事ができた。	ミマモルメの出欠システムの運用については、次年度健人部と連携の上周知を改めて行いたい。中学校の進路指導システムについては十分な成果を出せなかったため、引き続き次年度も検討を行いたい。中高のデータのやりとりについて、中学校側の校務支援データにおいて間違いが見られたので、スムーズに行えるよう検討を行う。	B	ミマモルメを活用していたように思う	A	
	(高) 今年度も幅広く情報を提供する。特に外部プログラムの案内は確実に行き渡るように提供する。また、進路行事として各学年団と連携して新たな企画も考案する。 <進路指導部>	(高) 特に大事な情報はクラスボックス・クラウドワークスペースだけではなく、終礼・授業を利用して重複して連絡したので漏れはなかった。進路行事については今年度考えられていない。	(高) 次年度以降も進路についての情報伝達の徹底を維持できるようにする。行事については進路企画ではなく学年企画のままでよいのか学年と連携するのかを考える。	A	終礼などで重要連絡をしていたように思う	A	

	単なる学校選択としての進路指導ではなく、生徒が自己の生き方を考え、将来の進路を主体的に選択していく能力や態度を育成するため、個性の伸長を図りながら、社会的な資質や行動力を高めるようにする。 <生徒指導部>	生徒が主体的に自己の生き方を考え、進路選択していく能力や態度を育成することができた。さらに、行事の企画などを通して、社会的な資質や行動力を高めることができた。	高校自治会と中学校生徒会の活動について、中高それぞれで独立しすぎており、互いにどのような活動をしているのか、教員側が把握できていない部分があった。校種を越えて、指導の在り方や活動の内容の検討が必要。	A	生徒自身が進路選択をするよう指導されていたように思う	A	
(2) 生徒と教員が協働して健康と安全を意識した教育環境の整備を図る。	授業を行う前後における運動の場の安全確認は当然だが、授業中も生徒がお互いに健康チェックを行う制度を構築する。 <保健体育科>	生徒同士で活動中に声を掛け合い、体調確認をすることができていた。	走幅跳のピットの破損個所の修復を依頼しているが、高額になるため着手できていない。	B	生徒同士で声を掛け合い、体調確認をしていたように思う	A	
	生徒たちが安心してのびのびと音楽活動に取り組むことのできるよう、生徒と教員が協働して音楽室等の環境整備をすすめる。 <音楽科>	本校の芸術の伝統を継承・発展させていくためには、音を学ぶ「場所」が必要不可欠である。昨年度に引き続き事務室と連携し、生徒とともに物品の整理を行い、できる限りの環境整備をすすめた。	本校の音楽室には楽器庫がないため、楽器を安全に保管する場所がない状況が続いている。引き続きこの状況の改善を具申し、生徒たちが安心して芸術活動ができる環境を整えていきたい。	B		B	
	学校が有する防犯、災害リスクに対して、生徒・教職員がリスクを共有し、予防的行動を適切に行えるように、訓練やマニュアルの整備を行い、生徒・教員の減災・防犯意識を高められる安全教育を推進する。 <健康人権部>	例年よりも煩雑な状況下で、現実の災害・不審者侵入を想定した訓練を行うことができた。生徒への事後アンケートの他、教員による意見交換の場を設定することができた。	有事の際の教員個々の動き、本部の動き、迅速な生徒の安否確認の方法、集合状態の指導など、それぞれの項目について検討を重ね、より適切な防犯防災体制の構築が必要である。	B	災害、不審者侵入を想定していた訓練をしていたように思う	A	

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	3. 学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価 を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 最近の学力観をふまえて <u>カリキュラムマネジメント</u> を実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積する。	各言語活動に対する評価の方法を探索し、生徒の能力の向上に付与できるメソッドを開発する。ICTを活用した授業実践を行い、校種・学年を超えて授業づくりを行う。 <国語科>	研究推進日にて、講師の西岡先生のご指導を受け、評価方法の議論を深めることができた。また、中学校においては、特定の単元で担当教員を交換し、それぞれの得意分野での学習指導を行うことで学年を超えた授業づくりができた。ICTについては、必要に応じて適切に用いることができた。	評価方法については引き続き、議論を続け、実践を重ねる必要がある。また、小学校とも連携し、生徒の実態に即した学習指導を実施する必要がある。中高で担当教員を交換した授業なども有効だろう。	B	ICT を適切に使用しているように感じた	A	
	中高社会科で連携しながら、他教科での学びを活かすことを意識した授業を実践する。その実践においては、民主的な社会を構成する市民にふさわしい能力を身に付けさせるため、正確な知識に基づき、思考し、表現できる力が育成できる授業方法を工夫し、提案する。 <社会科>	中高で連携しながら、他教科での学びを意識した授業実践を行うことはできた。しかし実際に他教科と連携して、教科横断の取り組みを行うことは十分にできなかった。	教科横断について中高社会科内で議論するのみではなく、他教科との連携を図らなければならない。そのためにはまず社会科の学習内容の中で、他教科との関りが深い分野について、社会科内で議論し共有する必要がある。	B		B	
	日常にある事象を数学的に解決できるようにし、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力が養えるような授業展開を検討していく。また、ICTの活用や教科横断的な学習指導も取り入れた教育内容開発・授業実践を試み、教育研究会で公開する。 <数学科>	数学的文化史の教材を用いて、日常にある事象を数学的に解決できるような教材開発・授業実践をすることができた。また、教育研究会では、数学的文化史だけでなく、教科横断的な学習指導(理科)を取り入れた研究内容を発信することができた。	ICT の活用や教科横断的な学習指導を取り入れた授業実践については、来年度以降も継続して数学科として取り組むべき課題である。	A	ICT の活用をしているように思う	A	

ICT 機器を利用した動画の撮影やチームでの活動を通して、個人・チームの課題を解決しながらお互いに成長し合えるように協働的な活動を取り入れる。生涯スポーツを視野に入れながら他教科と横断的な学習を取り入れる。 <保健体育科>	(高) 中学と同様に持久走の授業で ICT を活用した他にも、砲丸投、アルティメットでも動画を用いて授業を展開した。	ICT の活用によって生徒の学びが深まることが示唆されたが、砲丸投以外は大学の先生との共同研究の形で実施ができた。中高で活用できる機器の準備を進めていく必要がある。課題解決型の学びを支える場面設定を引き続き行っていく。	A	ICT を用いて授業を行っていたように思う	A	
STEAM や CLIL を取り入れた授業実践を通して、効果的な ICT 活用実践を促進する。一人一台の端末を活用し、協同的学びと個に応じた学びを支援する。 <英語科>	(高) 教科横断的な授業において、英語論文を班で分担し Padlet で要約を作成する活動や、発表活動やスピーキングテストを動画投稿を通して行うことによって、繰り返し練習させようとして発表活動に取り組みさせることができた。	(高) 必携となっているノートパソコンを授業に持って来ず、小さな画面のスマートフォンで代用する生徒に対して、ノートパソコンを活用するように指導する必要がある。	B	スピーキングテストを動画投稿にしたりして、授業を行っていたように思う	A	
GoogleWorkspace やロイロノートといった授業支援ツールの運用や運用支援・GIGA 端末の運用管理や BYOD 端末校内における運用支援や活用の推進を行い、ICT を活用した授業実践の推進に貢献する。 <教務部>	GIGA 端末の運用や GoogleWorkspace、ロイロノートの運用を行う事ができた。また、ロイロノートの授業実践を行い、ロイロの会社にフィードバックを行った。	高等学校では時間割変更以外の連絡事項についても紙媒体から電子媒体への移行を検討し、BYOD のさらなる活用を探る。	A	ロイロノートを使用して活用していたように思う	A	
生徒指導における ICT の活用を模索し、生徒会活動、行事、部活動などの場面で ICT 活用を実践する。また、情報モラル研修などを企画し、生徒が安全で正しく ICT を活用できるよう、適切な支援を行う。 <生徒指導部>	様々な行事において、ICT をより効果的に活用できるように指導することができた。また、情報モラルの育成のための企画や研修、指導などを行い、生徒が安全に正しく ICT を活用できるよう支援することができた。	ICT 機器のさらなる活用とともに、情報モラルの意識向上も継続して行う。生徒に対してだけでなく、教員の ICT 活用と情報モラル指導のための研修など、生徒指導部を中心に行っていきたい。	A	ICT をより効果的活用出来るよう指導を行っていたように思う	A	
年9回の推進日を活用し、講師による研修を具体化させ、教員が協同し議論する場を設ける。 <研究部>	研究推進日にて、全3回、講師を招き、研修を行なった。また、その他の推進日にて、校種や教科を超えて情報共有や議論の場を設けた。	全9回の推進日のうち、3回の小中高研究部会があるが、そのあり方の検討を行う必要がある。各校各教員に有意義な機会としたい。	A	どのような研修かが見えにくい	A	

(2) 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。	社会科で育てたい共通のコンピテンシーについて議論をし、明確化する。それをもとに中高社会科が連携し、情報交換や授業見学を積極的に実施する。 <社会科>	公民的資質の育成という社会科で育てたいコンピテンシーについて共有することができた。またそれをもとに高校の教員が中学校で授業を行うなどの取り組みを行うことができた。	中高連携や情報交換は一定程度達成できたが、授業見学等を行うことはほとんどできなかった。時間割を調整するなど積極的に取り組む必要がある。	A		A	
	中高数学科で検討された本校数学科が重視する9つのコンピテンシーについて、積極的に反映した実践研究を積み重ねる。また、これを数学科で共有し、体系化を目指すとともに、研究集録において公表する。 <数学科>	普段の授業内容と昨年度構築した9つのコンピテンシーを照らし合わせて、振り返ると概ね達成できたと考える。また、本校数学科のコンピテンシーと実践内容を関連させた内容を研究集録で公表することができた。	実践事例を数学科内で情報共有すること留まり、数学科内で体系化を目指すことができなかったが、数学科教員の中で意識付けを行うことができたと考える。	A		A	
	科学的根拠に基づく論理的思考力を育成する授業実践に加えて、教科横断の授業も開発・実施する。 <理科>	地学を軸とした教科横断授業を考案・実践し、教育研究会にて発表した。	複数科目で新たな授業を開発・実施する。	A		A	
	各学年において令和3年度作成のCAN-DOリストの達成状況の報告を学期に一回行う。 <英語科>	(高) 高I、IIで1学期末と3学期末にCAN-DOリスト達成のアンケートを生徒に課し、年度末に教科内で報告を行う。	生徒にCAN-DOリストを確認する頻度に関しては、適切な時期にどのくらい行うかを再検討した上で、達成状況が生徒の学習意欲につながり、教員の指導に活かすことができるようにする。	B		A	
	(中高) キャリアパスポート(生徒が活動を記録し蓄積するもの)について中1~高2で実施。特に高校では初めての実施なので、中高で書式・構成などを検討し、実際の生徒や教員の声を聞きながら改良していく。また、中高で引き継ぐにあたってどのように連携できるのかを明確にする。 <進路指導部>	(高) 1・2年生を対象に使用に関するアンケートを実施した結果、紙媒体よりも電子データを好む生徒が70%であることや、記録をつけることに価値を感じている生徒が65%にとどまっていることが分かった。	(高) 書式については現状のままが良いが、記録の意義を何度も伝えていくと同時に、LHRを使用して短時間でも頻度を上げて記入する時間を確保していきたい。中高の連携については今後も検討課題である。	B		A	
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	教育研究会および全附属高等学校部会教育研究大会において、本校の実践を発信し、他校の実践・提言を踏まえ、カリキュラムマネジメントを行い、よりよいカリキュラムを作成する。 <国語科>	教育研究会および全附属高等学校部会教育研究大会において、本校の実践を発信することができ、成果が得られた。また、議論の中で、カリキュラムマネジメントについて情報交換を行い、より良いカリキュラムの手がかりを得ることができた。	中長期的な見通しを持ったカリキュラムマネジメントが必要である。	B	本校の実践を外部に発信する事が出来て良かったように思う	A	
	中高理科で実践している実習・実験の『探究のレベル』を分類し、研究集録もしくは大学紀要への投稿準備を進める。 <理科>	これらの2022年度の取り組みについて、研究集録に投稿した。	2023年度以降の取り組みについても記録し、同一生徒の連続的な学びについてもみる。	A		A	

	日々の授業実践や生徒たちが芸術活動に生き生きと取り組む姿をホームページ等で積極的に発信する。 <音楽科>	音楽科授業における取り組みを、本校・大学ホームページを通して広く発信した。	本校の特色ある音楽授業や、生徒たちが心から音楽を楽しんでいる姿を、保護者や教育関係者・地域の方々に向けて今後も積極的に発信していきたい。	A		A	
	「コンピテンシーを軸にした附属天王寺型STEAM教育開発」について地域に発信し交流するため教育研究会の実施を広く発信する工夫を行う。集録を通して、本校の研究内容を発信する。 <研究部>	教育研究会には、全国から200名を超える参加があり、本校の研究成果を広く発信できた。研究集録においては、各自の研究成果と教育研究会の報告を掲載することができた。	従来の公開授業ローテーションを調整し、附属天王寺型STEAM教育の授業を公開できるようにしたい。	A	本校の研究成果を広く発信出来て良かったように思う	A	

学校関係者評価における意見	達成状況記載が、もう少し具体的であると判断しやすい。また普段からこれら進捗に関わる発信をしていただくと良いと感じました 質問を子供と対話しながら出来たのは良かったと思うが、項目の数が多すぎる。
---------------	---

